

窪徳忠先生を偲んで

中牧 弘允

窪徳忠先生は 2010 年 10 月 2 日、97 歳の天寿をもって永眠された。あの筆まめな先生から年賀状がこなくなって数年、幽明境を異にすることになってしまった。もう学会で、あの大声を聞くこともなくなってしまった。さみしいかぎりである。

窪先生の讐咳に最後に接することができたのは、2005 年に関西大学で開催された宗教学会のときである。先生は大会の前日、わざわざ民博に立ち寄られた。そして例の大きな声で「中牧君、ぼくは 300 本論文を書こうと思っているのだが、なかなか達成できないんだよ」とこぼされた。奥様の看病のこと、調査地に出かけられないことを主な理由にあげていた。弁慶みたいな話だが、90 歳を越えてなお旺盛な学者魂にわたしは脱帽した。この追悼文のために調べてみると、2004 年 11 月 15 日におこなわれた窪先生を囲む座談会で、みずから 297 篇と述べておられる。一年間、足踏み状態がつづいていたのだろう。その後、300 本を突破したのかどうか、直接うかがう機会はついにおとずれなかった。

野村克也氏の言を借りるなら、先生は「生涯一研究者」をつらぬかれた。名声も地位もありながら、また紫綬褒章や旭日中綬章も受けていながら、学会では最後の最後まで報告をおこたらなかった。学会に出席するからにはかならず報告をすることをみずからに課していた。見事と言うほかはない。

窪先生は言わずと知れた道教研究者である。もちろん庚申信仰や沖縄の民間信仰の研

究もしていたから宗教民俗学者と言えなくもない。現に、そうした紹介もなされている。だが、「道教研究 50 年」という回顧録の命名からしても、宗教学者ならまだしも民俗学者というのはあまり適切ではないだろう。そもそも出身は東洋史だったし、方法論も歴史学そのものだったからである。

とはいえ、先生は民俗学にも深くのめりこんだ。転機は 40 歳の頃におとずれた。庚申信仰の起源をめぐる民俗学者とはげしい論争をくりひろげたからである。庚申講は江戸時代から諸国にひろまり、無数の庚申塔が建立された。庚申の日に画軸や字軸の掛け軸をかけ、供え物をし、共同飲食をしながら夜をあかす、いわゆる庚申待の習俗である。民俗学者はこれを日本固有の伝統と見なしたが、先生は中国伝来の三尸説に由来すると主張した。先生は民俗学者たちから日本各地の実態調査もせずに文献だけで中国起源説をとるのはおかしいときびしく批判された。そこで着手したのが国内の実地調査である。1954 年のことだった。先生はそれを精力的にこなし、『庚申信仰の研究』にまとめあげた。軍配は、窪先生にあがったようである。柳川啓一先生の授業でもそうおそわった。ただし、柳川先生は「声が大きかったせいもあるが」とつぶやかれた。

窪先生の授業にはわたしも数回、出席したことがある。しかし、単位をとるところまではいかなかった。方法論にあまりなじめなかったからである。その不肖の教え子が、縁あ

って民博に就職し、日本展示を手がけることになり、先生とさまざまな接点をもつようになった。まずは庚申塔のレプリカ作成である。1979年の日本展示のリニューアルでは石像で民間信仰をしめすことになり、田の神、山の神、道祖神、えびす、地藏にくわえ庚申もえらばれた。さっそく窪先生に相談したところ、もっとくわしい人がいるからと紹介され、二鶏、三猿の彫り物がある青面金剛の石塔をえらんでもらった。沖縄の石敢当についても窪先生の研究が役にたった。また、のちに三猿コレクションをオランダ人のコレクターから入手し、担当者として展示をおこなったときも、先生の著作に負うところがあった。もちろん先生にもご覧いただいた。

学恩を感じているのはそれだけではない。宗教学会か民族学会の懇親会のあとだったろうか、先生から博士論文を書くようにつよくすすめられたことがある。まとめかたについても、全体構成にもとづいて一つひとつ章や節を埋めていけばいいのだ、と指南された。そうしたやりかたで『庚申信仰の研究』もできあがったのだから、とざっくばらんに披露された。こうして、わたしも学位論文を書いてみようかという気になり、ひとつのはずみがついた。

礼儀についても先生には敬服のしどおしだった。先生は現地調査や主張のあと世話になった人にはかならず礼状をしたためた。贈呈を受けた本についても同様だった。すごいのは、機関としての民博が送付する『月刊みんぱく』や『民博通信』にまで、いちいち御礼の葉書を館長に届けたことである。拙文へのコメントもときどきあって、館長室からそのコピーがまわってきた。そこまで徹底する研究者をわたしはほかに知らない。

窪先生は民博の元老であった。明治の元勳みたいだが、創設期の功労者の何名かがそう

よばれている。1970年秋、大阪万博も終わり、日本民族学会は民博設立に向けて文部省をはじめ各方面に強力に働きかけていた。先頭に立っていたのは博物館問題担当理事の泉靖一東大教授であり、設立促進委員の梅棹忠夫京大教授だった。そして民族学会の会長が窪先生だった。その泉先生が同年11月に急逝され、梅棹先生がその分もひきつぐ格好で奮闘していくことになる。

その後、嘲風会の酒席だったか、窪先生が「関西に行くのはいやだ」と一見ダダをこねている場面があった。民博の万博跡地での立地が決まった頃だったかもしれない。泉先生のあとつぎで白羽の矢が立つのを警戒(?)しての発言であったのか。窪先生は前立腺をわずらったときも、「おれは病人だ。癌患者だよ、キミ」と公言してはばからなかった。同情(?)をひこうとしていたのかどうか、何とも言えない。

窪先生が1997年にもうけた窪徳忠琉中関係奨励賞についてもふれておきたい。これは沖縄在住の研究者を対象とした賞であり、沖縄への恩返しとしていかにも先生らしいと感じ入った。沖縄でかつての受賞者の一人が望外のこととして喜ばれていた姿にたまたま接したとき、なぜかこちらまでうれしくなった。律儀な御礼状の精神はこのようなところまで及んでいたのである。

沖縄在住といえ、わたしと同世代の渡名喜明君のことを忘れるわけにはいかない。かれは「窪徳忠先生と沖縄研究」という追悼文をブログにのせている。研究室のよしみで先生に世話になった者の一人である。

最後に、『月刊みんぱく』(1989年5月号)にのった「創業と守成と」という巻頭エッセイに言及しておきたい。窪先生は、唐の太宗の故事をひきながら民博も守成に努力してほしいと述べている。今となっては遺言にちか

い。そのあと老子の中国・インド転生説にふれ、こう結んでいる。「できれば私も、何十年か何百年たったのちに、この世に生まれてきて、見事に発展を続けている民博の姿をこの目で確かめたいものだと思っている。」この民博の部分を宗教学研究室や東洋文化研

究所におきかえても、さほどまちがいではないであろう。院生時代から折にふれて世話になった窪先生のご冥福を心からお祈りする次第である。